

紀行〈イタリア文学〉——サルデーニャ

グラーツィア・デレッダ Grazia Deledda (1871-1936) 著

『サルデーニャ短編小説集 Racconti sardi』(Dessi, Sassari, 1894

[Ilisso Edizioni, Nuoro, 1996]) 邦訳(その1)

清瀬 卓

〈Sommario〉

Il problema più importante che la Deledda nuorese ha affrontato nella sua lunga carriera di scrittrice è, senza dubbio, di risolvere un dualismo linguistico tra la sua lingua locale e la lingua ufficiale dell'Italia Unita, e di inserire il suo linguaggio e stile originale adeguato a creare il mondo letterario piuttosto poetico nella narrativa moderna italiana. In questo senso, il bilinguismo era un comune problema fondamentale da risolvere in modo proprio per tutti gli scrittori o poeti, non solo italiani ma anche europei, in specie nell'Ottocento e nella prima metà del Novecento. Il Premio Nobel per la letteratura, quindi, non è dedicato solo alle sue attività di narratrice con una bella varietà di arigomenti e temi sardi, ma anche al suo coraggioso sforzo di linguista personale, un lavoro più universale in ogni epoca.

Nel racconto deleddiano, tradotto in giapponese per la prima volta nel presente saggio di traduzione, si tratta di un tema che riguarda la strana usanza di vendetta comune nei Paesi mediterranei, oltre alla questione di punto d'onore, una mentalità caratteristica in Sardegna e in Sicilia.

夜間に (DI NOTTE)

幼いガビーナが上の階にある部屋の大きな木製寝台^{ベッド}で眼を覚ましたのは、11時だったようだ。その寝台^{ベッド}で、彼女はいつも愛情を注いでくれる母さんといっしょに眠るのだった。

でも、その夜は、母さんはそばにいなかった。はて、なぜ彼女はいないのか？ガビーナが大きな木製寝台^{ベッド}の隅々に可愛いお手を伸ばしてみても、母さんは見つからなかった。風のように、ひんやりとしたシャツと赤い薄手の綿織ものの枕が触れるばかりで、ほかに何もなかった。

母さんは、いったいどこにいるのかしら？ガビーナはいつも母さんといっしょに寝起きしてきたのに。恐ろしい夜の暗闇のなかで、こんなふうに大きな冷たい寝台^{ベッド}に一人ぼっちにされたことなど一度もなかった。

だから、幼い女の子にとって、それはたいへんな出来事だった。

「ママ…ママ…」— か細い声で、彼女は名前を呼んだ。

でも、返事はなかった。外では北風が吹き荒れ、小さな窓硝子^{ガラス}をガタガタ激しく叩いた。

そんな風がなければ、ガビーナはたぶんもう一度眠りに陥っていただろう。でも、寂しい小部

屋の深い夜の闇に地獄さながら唸る風の音で、眠気どころか気を鎮めることすら、彼女にとってまったく出来ない相談だった。

想像できる限りのあらゆる亡霊を、彼女は恐れた。死神や吸血鬼や風神や黒い妖婆や人喰い鬼など、なんでもかんでも…

「ママ…ママ？ …」——彼女は寝台に座りながら、大きな声でくり返した——「ママ…ママ？ …」

こうして、彼女は15分ばかりの間ますます大きな声を張り上げ、やがて闇にも風がたてる騒音にも馴れてきた。

母親の返事が全然ないので、ガビーナは服を着て、台所へ下りて母親をさがそうと考えた。毎朝服を着せてくれるのは母さんだった。まだほんとうに幼い彼女には、きつい袖の黒色の上着に腕を通すことが出来なかった。でも、それもさほど問題でなかった…スカートを見つけさえすればよかったから。スカートは、いつも寝台の脚の側の椅子の上に置いてあった。だから、寝台から降りて、スカートを見つけなければならなかった。

降りるって？ …こんな夜に裸足で暗闇のなかに降りるですって。一人で寝台から降りるの？ …それには、たいへんな勇気が必要だった。ガビーナは寒さと不安で身体が震え、長い間どうしようかと思案した。でも、母さんのいない寝台にずっと寝ていても仕方がなかった。ますます風の唸り声は激しくなっていた。ひょっとすると、部屋に吹き込んできて、ガビーナの顔に噛み付いてくるかもしれなかった…では、降りるとしよう！

彼女は降りると、叫び声を挙げた。小さな足が、何か固く冷たく異様なものに当たった。それは、たしかに歳月でツルツルになった床板ではなかった…

ひょっとして墓蛙とか、吸血鬼では？

「キャーッ…コワイ！ …」——幼い女の子は悲鳴を上げて、寝台によじ登ろうとしたが無駄だった。ついに、吸血鬼が動く気配を見せず、母さんの返事も依然としてなかったのだから、彼女は身をかがめて、たまたまそれが寝台の下からはみ出していた古い靴の片方であることを確かめた。

彼女の唇に、笑みが浮かんだ。その最初の冒険で、彼女はうんと勇気を勝ち得た。そこで、小さな足に何も恐れなぞと誓った彼女は、寝台の縁に掴まりながら前進した。でも、服と椅子はまったく見当たらなかった。イライラした彼女は、悪態をつき始めた。なぜって、彼女は躡手躡脚のお手本的存在でなかったし、祖父や伯父たちや母さんの口からも聞いたように、地獄のあらゆる鬼の名前をぶっきらぼうに口にしたらから。

いったいぜんたい服はどこにあるのかしら？ もし、悪魔に持ち去られてしまっていれば？ 夜は地獄へ送られて。そんなこと誰が考え出したっていうの！ …

彼女は一瞬その服のことを忘れ、あらためてブルブルと身震いをし始めたので、歯がガチガチ鳴って、服のことなど一掃してしまおうだった。

風雨が鎮まると、その時だけ、台所から奇妙なもの音と、嵐の叫びより不吉でぞろぞろしい人の声が聞こえてきた。

台所で何が起きているのかしら？ どうしましょう、神さま。そして、彼女の母さんは？ ひょっとして、泥棒か鬼がいるのかしら？ お爺さんも伯父さんたちも3日前から不在なので、気の毒な母さんを守ってくれる人は誰もいなかった！ …好奇心と不安がひとつになった。ガビーナは暗い部屋の椅子や粗末な家具類にぶち当たりながら、もう一度自分のスカートを探してみた。やっとの思いで、それを見つげると、彼女はなんとか自分で穿いたが、これで一段落ついたと思われた時、小さな女の子の計画に別の問題が生じた。

階段へ通じている扉は、外からロックされていた。どれだけ力を込めても、扉は開かなかった。ドンドンと扉を叩いて、彼女が母さんの名前をもう一度呼んでみても、恐ろしい沈黙が続くばかりだった。

意気消沈して、彼女は寝台のところへ戻った。乱れた厚手のベッド・カバーに顔を隠して、彼女は泣きだした。ところが、隣接した部屋には、石の小さな露台があって、そこから外側の狭い階段を通して中庭へ降りると、ちょうど露台のま下に台所の古い戸口が開いていることを不意に思い出した。

風雨はまだ止まなかった。でも、ガビーナはすべて手はずを決めていた。隣の部屋に入ると、小さな露台を開けて、低くたちこめた鉛色の空から狂ったように降ってくる雨と夜間に猛威をふるう凍てつく北風をものともせず階段を下りた。

彼女は木の葉のように身震いしていたが、幽霊や吸血鬼のことは、すっかり忘れてしまっていた。小さな胸を云うに云われぬ苦しみが締め付けていた。階下の台所で何が起ころにちがいないとの恐ろしい胸騒ぎを、年端もいかない彼女は感じていた。ほら、彼女が耳にした例の声が！ …

瞬く間に、雨がかからない階段の下にある台所の扉の前に来ていた。その扉も閉まっていた。しかし、炉に燃えている火のあかりが、扉の上から下へと出来ている隙間から見えていたが、ガビーナは開けてもらおうとノックしなかった。

地面にうずくまると、片方の眼を隙間に近づけた。

怖くはなかったけれど、きっと母さんにひっぱたかれるので、台所へ入ってゆきたいとも思わなかった。

祖父と伯父たち — 背が高くがっしりとした黒髪の三人の擦り切れ汚れた身なりは、何時までも続く辛い労働の惨めな日々を物語っていたし、彼らの不可解で陰気な眼差しは、貧乏で卑屈になっているのではなく、激しく暗く苦い情念に振り回されている心の悲しい物語を反映していたが — 彼らは戻って来ていて、炉辺を囲むように腰を下ろしていた。

ガビーナの母さんのシモーナは若い美人で、そのアラブ人のような異国的な美貌はサルデーニャ女性の多くに見られるもので、9世紀から10世紀にかけて島を支配・蹂躪した回教徒の面影をとどめていたが、やや物陰になった地面にじっと座って、両手を膝の上で組み、靴を履いていなかった。彼女が着ているブラウスの袖は、東洋風のゆったりとしたもので、手首のところか締まっていて、優美な二の腕のところに襷がくっついてあった。

ガビーナは、普段から生気がなく悲しげな母親が、こんなにも青ざめ陰鬱な表情をしている姿を今まで一度も見たことがなかった。彼女の黒い瞳がこんなにも不思議な輝きを放っているところを目撃したこともなかった。

額を覆うように黒いスカーフにくるまれたシモーナの顔は、死人のような顔色で、その繊細きわまりない輪郭は微動だにせず、ぞっとするほど暗い深刻さに引き撃っていた。輝く眼は、憎しみと苦悶の内面を反映していた。

ところが、ガビーナの注意をよりいっそう引き、彼女を戸外にいやおうなく留ませたのは、炉辺近くに座っている見知らぬ男の顔だった。彼は、台所の唯一の家具である古ぼけた椅子に、しっかりと毛皮のロープで縛りつけられていた。その椅子は部屋の片隅にいつも置かれていて、誰も触ろうとせず、シモーナがしばしば陰気な眼差しを向ける粗末なものだった。

ガビーナは、その時まで村人の衣装を身に付けている見知らぬ男の顔を一度も見かけたことがなかった。彼女は好奇心から、こんな真夜中に彼がいったい何者で、なぜそこに縛られた状態にいるのかと自問自答しながら、あれこれ考えてみた。

彼は四十がらみの容姿端麗な男性で、日焼けした広い額に赤味がかかった金髪がウェーブしていた。鋭い眼は灰色で、胸元まで赤毛の立派な髯が垂れていた。彼の顔は、激痛に見るからに歪んでいた。炎の反射で、額に吹き出た玉のような大粒の汗が光っていた。でも、他の人々、特にシモーナのように、彼は青ざめていなかった。

もちろんガビーナには、仔細がすべてのみこめたわけではなかった。でも、その台所のなかで何か不可解で異常な事件が起こっていることはじゅうぶんに察知できた。台所は、炉の炎と燈火に照らされていた。燈芯の煤で黒ずんでいるブリキ製の4つの火口付き燈火は窓戸の上に置かれていたが、消えかかっていた。彼女は、どのような状況説明も自分に云って聞かせることができず、隙間に額を押し付けたまま、扉の背後に身動きせずに黙って佇んでいた。彼女の食い入るように見開かれた灰色の眼は、椅子に縛り付けられた男の眼の色にかなり似ていた。

幼い女の子は、また身体をブルッと震わせた。好奇心がひとたび消えてしまうと、先ほど感じた空恐ろしい気分が再び心に重くのしかかってきた。そして、すべては怖い夢ではないのかと自問していた。

凍てつく風の息吹が、ところどころ露出した肩に吹き付けてきた。彼女の小さな足や手や全身に、雪が降り積もっていた。中庭に侵入してきた雨水の水溜りは、篠突く雨のために見る見る広がって大きくなっていった。彼女は素早く逃げ出すか扉を開けてもらおうかせざるを得ない状況だったが、我を忘れていて雨水に気付かなかった。あまりに寒いので、泣き叫びたいぐらいだったが、それでも動こうとしなかった…何かは彼女の喉につかえて、何度も痙攣のように空しくしゃくりあげる彼女の唇は、寒さと恐怖で鉛色にひどく歪んでいた。

その理由は、こうだった。今彼女が見たり感じたりしているものが、とても恐ろしい光景なので、ようやく9歳になったばかりのか弱い魂の彼女だけでなく、どのような男性だって身が縮む思いをしたことであろう…

「エリアス、エリアス！」——シモーナの父親は叫んだ——「お前が助けを求めて叫んでも、無駄だ。誰も来てくれはしまい。嵐がお前の叫び声を消してしまうから。誰もやって来ないだろう。椅子に結^ゆえられたまま覚悟をするのだ。その椅子に、10年前、お前は毎晩、憶えているか、哀れにも腰を下ろしていたことを。毎晩だ…正式の相応の婚約者として！…わし等が10年の間、執拗に守ってきた椅子だ…お前を迎えた椅子だ…それをわし等は、卑劣漢^{ひれつかん}のお前の血糊がべったりとついたまま、火に投げ込もうと思うのだ…」

「弁護したら！」——陰気な調子でシモーナは云った——「お前さんの卑怯な行為の云い分けを、ひとつでもしなければ、お前さんはおぞましい死に様を迎えるだろうさ！弁解したら。謝ったら。そして、一発ぶっ放せば、すべてカタがつくだろうから。さもなければ、お前さんは救われないよ！…」

「お前まで、そんな風に云うのか？…」——エリアスは返事をした——「女のお前が、気立てのよい女と思っていたお前までが？当のお前が？」

「私は憎い、お前さんのことが。私の名誉を傷つけたお前さんが。許婚者^{いいなづけ}として私が頼りにしていたお前さんが、この私を裏切って破滅させたのだよ。この苦しみは、私のあらゆる人間としての感情を麻痺させてしまった。お前さんが憎い。復讐することだけを、この10年間というもの、私は切に願ってきた。この私が味わってきた苦しい思いに比べれば、今夜のお前さんが感じる煩悶など、卑怯者のお前さんにとって、何だっていうの？それは憎しみでしょ。この私の方こそ、憎しみにけしかけられて復讐を遂げるのさ…」

「じゃあ、殺すがいい！…」——エリアスは口ごもった——「だが、良心ってものが、神さまがいることを考えてもらいたい…」

「それを云うなら、我々の良心と神が正してくれよう！」——兄弟のひとりのターヌが叫んでいた。残酷で猛々しい笑いを浮かべた口元には、獣じみた真っ白い強靱な歯並びが2列になって、炉の炎にキラキラと光っていた。

「良心とか神だって！…」——毒蛇のように、シモーナはいきなり立ち上がった——「良心なんてものを持ち合わせていたのかい、神のことなど考えたことがあるのかい？…」

エリアスはうなだれた。

「私たちの娘に誓って…」——彼は云った。

「じゃあ、ひとりの娘が私にいてるってことを承知しているのだね？…」

「ああ、知っている。お前が望むなら、認知する。彼女を引き取るつもりだ。私は今では金持ちだし、もうひとりの女性には子供がいないので、彼女は将来お金持ちになれる…」

「何をほだしているのだ！」——もうひとりの兄弟のピエトロが叫んでいた——「生きても死んでも、ここからは脱出できないことが、お前にはまだ解らないのか？…」——彼は膝の上で銃身を長い間抱くようにして、非情なほどゆっくりとことばを口にした——「俺^{おれ}さまが息の根を止めてやる。お前の友人で、我々の家に招き入れた俺^{おれ}さまの手で。お前が不運を招き、恥をかかせたからには、俺^{おれ}さまがお前を殺す。そして、まがまがしい哀れな蛇のいる墓場へ連れて行って

やる。いったい誰と同席していると、お前は考えているのだ？ 誰といっしょにいると思ってるのだ？ 我々の一家は、侮辱されれば、報復は欠かしたためしなかった。10年間バルバージャの村という村を、雪の山中を、切り立った溪谷を探し回った我々が、今夜は、お前が汚点をつけた我々の名前に、お前みずからの血で償いをしてもらおう。」

「シモーナ、シモーナ！ …」 — 囚われの男は、動転したのか、懇願するような視線を彼女の方へ向けながら眩いた — 「私たちの娘を…」

「黙りなさい。名前を口にしないで！ あれは罪の落とし子です。でも、ジェンナルジェントゥの雪のように無垢だわ。お前さんがその名前を口にすると、彼女は穢れた存在になってしまいます。だって、お前さんは卑怯で、恥知らずだから。お前さんは、彼女からすれば存在しないも同然さ…彼女の父親は神だもの！ …」

「シモーナ、お前は女の子を愛していないのだ！ 愛しているのなら、この私を見殺しにはしないはず！ …」

女の陰鬱な眼に、一瞬ピカッと光るものがあった。

「私は娘をととも愛しています。彼女のためだけに生きているのだもの。もし彼女の姿が見えなくなるようなことがあれば、私のまわりのすべては崩れ落ちて、さしずめこの世の女の中で、一番不幸な存在になってしまうでしょう。だって、私は彼女のことを愛しているもの。私の娘を。可哀想な幼い娘！ 彼女は、私の生命で倅せそのもの！ もう一度くり返すけど、彼女の名前は口にしないでよ。彼女の記憶は、憐れみの気持ちへと私を動かすだけでなく、私のなかで事件の後では取り返しをつかないものとなり、私を憎しみと復讐への執念へと掻き立てるの。お前さんが墓場に入ってくれることばかりを私は願っている。彼女が父親のことを私に訊ねでもすれば、恥ずかしそうに赤面することなく、《亡くなったの！ …》と彼女に告げることができるために。」

「では、話は決まった！」 — エリアスは大きな声で叫んだ — 「さっさと殺してくれ！ ご覧の通り、覚悟はできている！ お望み通り、卑劣漢として死んでゆこう。お前が間違っている、私のせいではない。偶然のせいだし、神の思し召しというわけだ。殺してくれ！ …」

「殺してくれ！ …」 — 陰にこもった風の唸り声が、外でくり返していた。

一瞬の間、この不吉な悲劇的田舎芝居に登場している5人の人物たちは押し黙った。恐ろしい静けさが、彼らの顔に皺を刻んでいた。相変わらず、炎がその光景を血のように赤い色で照らし続けていた。それは、陰惨なカラヴァッジョ作品に相応しい光景だった。

「2年間の狂おしい愛を経て、私に不貞を働いたのはなぜなのか、ありていに話しておくれ。」 — とうとう、シモーナがじっと自分の考えに拘るように云った — 「忘れていなければ、私は母となっていたので、私たちはすぐに結婚するべきだった。お前さんは馬に栗の実や乾酪や木の道具をうんと積んでから発って、ヌオーロでそれらを売りさばいて、私に結婚指輪と宝石を買ってくれることになっていた…4、5日すると戻ってくるはずだったのに、私を泣く泣く捨てたわ…あれから10年の歳月が経過した…煩悶と涙と憎しみの10年だったけれど、まるで昨日の

このように思われる…お前さんは戻ってこなかった。1月後、お前さんがフォンニの娘っ子と結婚したことを私は知らされた！…話さない！もう一度云うけれど、もし云い訳するのなら、一発でお前さんを殺してやる。さもなければ、ここに間違いなくお前さんは結わえられているのだから、キリストに誓って事実として、私たちは生きてままで火あぶりにするつもりだ！…」

シモーナの口調があまりに厳しいものだったので、エリアスの全身には、恐怖の震えが走った。それにもかかわらず、彼はそれを包み隠して、淡々と返事をした — 「火も銃弾も私は恐れない。事件の顛末も、お前たちには話して聞かせよう。私のせいではないことは云っておく。神の思召しだったのだ！…聞いて欲しい！…」 — 彼は話し始めた。

「そうだ、10年前のことが、昨日のこのようだ！私はお前のことを考え、将来の私たちの生活のことを夢に描きながら、発った…ところが、神は他のことをお望みだった！私はフォンニ村から2時間ほどの距離のところに来ていた。そこで一晩過ごしてから、翌朝にヌオーロへ向かって旅立つ予定だった。雪が降り出した。季節がら悪天候には慣れっこになっていたのに、別に驚きはしなかった。山間の溪谷を縫って、私は険しい隘路を辿りながら、積荷をうんと背負った仔馬を先導して歩いた。馬は懸命に歩いた。吹雪が顔面に吹き付けてきた。私の服にも、両手にも、眉毛や唇まで雪が張り付いた。瞬く間に、私の厚手の外套も雪で覆われてしまった。栗の実が入った鞍袋も馬の背中も、どこもかしこも…

隘路は雪に埋もれて消えてしまったが、土地勘があると信じていた私は、フォンニ村の集落が時々チラッと認められるように思えた地平線の彼方に眼を凝らしながら、戸惑うことなく一直線に進んでいった。山岳地帯で、風は狂ったように唸り声をあげていた。宵闇が急に迫ってきた。雪は降りしきっていた…私の足跡を埋めるように、絶えず降ってきた…山地の野生的な寂寥感を中断してくれる人の姿はまるでなかった。ただ馬と私だけだった。骨の髄まで濡れねずみになった私は、正気を失いかけていた。行く手にフォンニ村が見えなくなって、自分が道に迷ってしまったと考え始めていた。ブルブル震えている馬は、可哀想に、もうこれ以上進むことができなかった。雪はどんどん降り積もってゆく。一步前進するにも、15分もかかった。しかも、闇は刻一刻と深くなっていった。半時前に雪が降り出した時、たまたま見つけた羊小屋に踏みとどまらなかったことを後悔していた。そこなら、羊飼いがやがて吹雪になることを予測して、一晩の宿を貸してくれたはずだった。絶望感に襲われた私は、急遽方向を転じて、その場所まで引き返そうと考えた。もう歩いて進むことも出来なかったので、私は馬に乗ることに決めた。ところが、家畜は私よりもっと疲れ切っていて、おまけに積み荷をどっさり背負っていたので、その荷物を全部下ろすと、仕方なく一本の木の下の安全な場所に隠して、翌日取りに来れるようにと願いながら、馬に跨ると鞭を入れた。

《急げ！》 — 可哀想な仔馬に優しく私は声をかけた — 《向こうへ着いたら、今夜はゆっくり休もう。明日になれば、素晴らしいお天道さまが昇ってきて、ここへ戻ってくる事が出来るだろうから。我々の品物を取り戻してから、フォンニ村へ行くことにしよう。あそこまでたどり着けば、もう心配することはなからう。さあ、急げ！…》

ほんの僅かの間、馬は私の考え通り、云うことを聞いてくれるように思え、とぼとぼと進んだ。ところが、ある処まで来ると、歩く速度が落ちて、とうとう立ち往生してしまった。私がけしかけ、あやし、叩いても無駄だった。もはや動こうとしなかった。そこで、私は馬から降りて、哀れな家畜を引っ張りながら、歩き出すことにした。

何と恐ろしい夜だったことか。風は止んでいたが、深く人気のない夜が山地を支配して、雪は止むことなく降っていた。岩壁を覆う雪の淡い光のお蔭で、絶壁から転落する危険を逃れたが、次第次第に眼は霞み、濡れたゲートルの両脚は痺れてきて、よろめきながらトボトボと踏みしめてゆく雪さながらに、全身は冷え切って力が入らなくなってきた。一度は、私と馬は溝に落ちた。私はやっとの思いで立ち上がったが、馬はもはやじっとうずくまったままだった。私は馬を助けようとも思わなかった。

再び私は道を歩き始めた。全身雪まみれで、大粒の涙が眼からあふれ、髻に付着した白い雪と混ざり合った。冷え切った重い厚手の外套の下で、両手は力なく凍えていた。脚だけは、よろめきながらも無意識的に一步一步と前進していった。夜の闇に燈し火はまったく見えず、人の声が山地の恐ろしい寂寥を破ることもなかった。

左も右にも白い山の頂が聳えていて、灰色の空に消えていた。地平線からゆっくりと降りてきて、私の周囲を取り巻く背後の霧の彼方に、私は何も認めなかった。足下の傾斜地は、溪谷と断崖が多く、前方に広がっていた。確かに、これは数時間前に辿ってきた道ではなかった。違った。道に迷っていたので、羊小屋が自分の前に姿を現してくれることはなかった。その時、フォンニ村への道を、どうして私は辿って行かなかったのか？振り分け型の背負い袋を自分が置いてきた場所から、たぶんさほど遠くはなかつただろう…おそらくは…たぶん…

力が次第に失せてきた。半時間の骨の折れる無駄な歩行を続けた頃、深く黒い霧が激しく襲ってきて、私を取り巻いてしまった。霧は傾斜地を下って、最後の明りを私から奪ってしまった。もう一步進んでいたら、おそらく私は奈落の谷底へ転落していただろう。ともかく、もはや雪が膝まで達していたので、今では前進は不可能だった。いったん脚が嵌まり込んでしまうと、それをかろうじてコントロールすることが出来たにすぎない…

私はずぶ濡れだった。何も見えなかった。視界と同様に、頭にもベールがかかっていた。雪のなかで転倒し、最後にシモーナのことを考えながら、神に自分の魂を委ねた…」

まるで、その悲しい夜の思い出にひしがれたように、一瞬、エリアスは押し黙った。おそらくは、今彼が経験している一層悲しい夜と比較していたのだろう。

「話を続けなさい。」——シモーナが云った。もはや彼女の口調は猛々しくはなかった。彼女の視線は床に向けられたままで、心なしか、その顔の冷酷な表情は、全体的に微妙に変化していた。エリアスはそれに気付き、希望に勇気付けられて、やがて続けて云った。

「我に帰った時、日はすでに高くなっていた。私は、広々とした台所の奥の温かい寝台に寝かされていた。台所の中央に石の囲炉裏が切ってあって、すごい炎を上げて燃えていた。その暖かさが、私のいるところまで伝わってきた。台所に備え付けられた食器類や家具類の量からして、

ここは裕福な家族の住まいに違いないと思った。ひとりの娘が囲炉裏端で昼ごしらえをしていた。その衣装から、彼女がフォンニ村のものであることが分かった。では、自分はフォンニ村にいたのだ…誰がここへ連れてきたのだ？ 誰が助けてくれたのだろうか？ …10時間前の自分と今の自分で、こんなにも置かれている状況が違うとは！ 真っ黒な空と霧にとざされて、雪の褥に突っ伏して瀕死の状態だったのに、気が付くと暖かい寝台の上において、おそらく私が息を吹き返すのをじっとうかがうためだろう、綺麗な娘がそばに付いているのだ！ …

本当に、美しい娘だった！ 私の様子に気付くと、近寄ってきたので、私はポッターとした様子で、彼女を眺めて、これは夢幻ではないのかと自問していた。これほどまでに美しい女性に、かつてお目にかかったことがなかった。祭礼の日の〈甘い乳の聖母〉を除けば。

大きな黒い瞳も、髪も、薔薇色の肌も、小さな口も、くっきりした鼻筋も、長く透き通ったうなじも、容姿全体が、つまり何もかもが…

形のよい腰の線が見て取れるタイトなスカートを穿いていて、房飾りのいっぱい付いた靴を履いた小さな足がのぞいていた。厚手羊毛の黒いコルセットに純白のブラウスを着ていたが、はだけた釦の間から小さな胸もとがちらりと見えた。もう18歳にはなっている娘なので、ブラウスの襷を通して、ふっくらとした乳房の輪郭がほの見えていた。」

「こうした仔細を何もかも話すのは、」 — エリアスはさらに語り続けたが、その間、シモーナの眼差しには、フォンニ村の早乙女が、自分の人生の倅せのすべてを奪い去った女性に違いないと思ひ込んでか、先ほど感じられた陰鬱な閃光がキラリと閃くことがあった — 「この自分が道を踏み外したそもその原因をどうしても説明したいからなのだ。」

「ともかく、私はポッターとなって彼女の姿を眺めていた。彼女が肩の掛布をなおしてくれている間、私の全身がブルッと震えた。白状するが、哀しいかな、その瞬間、私は吹雪の夜のことも、雪の中で凍え死んだ馬のことも、失くした栗の実のことも、こうして寝台に寝かされている理由もすっかり忘れ去ってしまっていた…

《具合はどうかの？ …》 — 手首の脈を診ながら、少女は私に訊ねた — 《もう5時間も、うわごとを云い続けていました！ …お名前は？》

《君こそ名前は？ …》 — 私の方がかすれ声で訊ねていた — 《ここはどこなの？ …》

《ここは私の家よ！ 私の名前はP.コジマ。今晚、使用人が山を越える途中、雪の上で死にかかっているあなたを偶然発見したの。馬の背にあなたを担ぎ上げて、ここまで運んで来たの。ここはフォンニ村なの。あれこれ介抱した甲斐があって、今朝の5時頃、ようやくあなたの意識が回復したわ。でも、すぐに熱が出て、意識が混濁したので、あなたの名前をうかがうことができなかったの。服装から、A村の人だとは思っていたけれど…まだ、お名前を教えてもらっていないわ！ …》

私は、旅の理由とまじかにひかえたシモーナとの婚礼のことを包み隠さず、自分のことを彼女に話して聞かせた。

《あなたはよほどお金に困っているようね、結婚指輪を買うために、これほど辛い旅を経験し

なければならなかったところを見ると！ …》——大きな黒い瞳を輝かせて、コジマは私をじっと見つめながら、こう云った。

《それは違う、》——私は云い返した——《お金にはさほど不自由はしていない。私には、毎年の冬に20スクードの収益を齎^{もたら}してくれる栗の樹を植えた囲い地がある。手入れはお手のものだ。でも、時々ヌオーロへ出向いて、収穫物を売りさばく必要がある。荷馬車も牛も馬も家だってある…お金に困っているのではない。それに、シモーナの持参金もあるし…》

もう長い識り合いであるかのように、実に打ち解けた雰囲気^で、私たちは長話をした。コジマは、自分は孤児だが、お金はたっぷりあると語った。ほんの数ヶ月前、後見人に死なれたので、財産管理は彼女自身^でしているのだった。家政婦がひとりと、使用人が二人いた。ひとりは田畑の世話をし、私を助けてくれたもうひとりの方は羊の番をしていた。

屋敷と広々とした菜園の他に、囲い地には多くの家畜を所有していた。

私が起き上がろうとすると、彼女は制止して、病気の^だし、夜間往診してくれた医師が出発することも起きることもさせないようにと命じた^と云う。それで、私は世話になることにした。家政婦のペツパがや^{わん}って来て、椀一杯のスープをくれた。彼女も医師の命令だけでなく、女主人と同じことをくり返し私に伝えた。

事実、しばらくして寒気を感じると、再び熱が出た。愉快な熱^で、寝台^{ベッド}のなかで私を小躍りさせ、グルグルと部屋が回転して、頭がおかしくなるほどひどい眩暈^{めまい}に陥れた。こうして、1週間というもの、私は生死の境^{さまよ}を彷徨った。意識がはっきりしている間、私は自分の現在の状況と戻るのが遅れるが心配しないようにシモーナに伝えてほしいと、コジマに頼んだ。すると、娘はいつもそうしてあげると云って、極力安静^{こんかん}にしているようにと懇願^{もた}した。悶え苦しんでいる間も、私はシモーナのことばかり考え続けていた。ところが、私の眼と発熱で正気を失った頭は、コジマの美しい姿が、台所のあちこちを邪魔しないようにと抜き足差し足で往ったり来たりする様子を追っていた。彼女はしばしば寝台^{ベッド}の上に身をかがめて、ひんやりした色白^{てのひら}の掌^{ひたい}を私の額に置いたりしながら、枕元で徹夜の看病^{おとめ}をしてくれた。私は、その無垢^{おとめ}だけに危険な乙女の眼差しに、すっかり心を奪われてしまった。

私のことを何も知らないで、彼女がほどこしてくれた治療と看護は、ますます深い感謝の気持ちを私に掻き立てるとともに、婚約者シモーナの不可解な無関心^{けいべつ}に対して軽蔑するように私を仕向けた。私が自分の村から遠く離れて、彼女が原因で、しかも彼女のことを考えながら死にかかっているというのに、シモーナからは何の音沙汰^{おとさた}もなかった。おまけに、家族の他の者も便りを寄こさなかった…それでも、私は彼らのことは考えなかったし、気にもしていなかった…

1週間すると、ようやく気分も良くなり、医師はもう8、9日もすれば村へ帰ることができるようになるだろうと私に云った。旅の不首尾と婚礼が遅滞したことを考えると、私は胸が痛んだ。コジマが使用人を山へやって捜してくれたが、馬と栗の実を見つけることはできなかった。それは、まさに私が道に迷ったような嵐の夜のことだった。軽く台所^{ドアー}の扉が開いて、ひとりの人物が入ってきたが、それが誰なのか最初のうちはよく判らなかつた。

真夜中だったはずだ。寝台^{ベッド}に寝ていた私は、ゴーゴーという風の音を聞き、他に人のたてる物音を遮^{さえぎ}ってしまっていた。暖炉^{だんろ}の火は灰で埋もれて、時々パツと青みがかった炎が上がって、ポツと台所を照らし出した。ぼんやりとした明りのなかで、ベツパが部屋に入ってきたものと私は思い込み、それは病気が治^{なお}って、スヤスヤと私が眠っている様子を確かめるために来たに違いないと考えた。私は眼を半分開いて、あたかも眠っているかのようなポーズをとった。

女は抜き足差し足で、私の寝台^{ベッド}のところに近付いて来ると、立ち止まり、私を長い間じっと見入った。その眼は、暗闇のなかで爛々^{らんらん}と光っていた。無意識のうちに、全身に鳥肌が立つ感じがした…

それはベツパでなく、実はコジマだった…

いったい、どうしようというのだろうか？ なぜ、私に見入っているのだろうか？ じっと睨^{にら}まれて、私の全身に震えが走るのは、なぜなのだろうか？

彼女は、矢庭^{やにわ}に身を屈めると、私に接吻^{キス}した…

彼女の唇^{くちびる}は、熾火^{おき}さながらに、カッと燃えていた。私の体^{からだ}は、まるで焼けた鉄に触れたかのように、ビクツとなった。私を起こしてしまったと思い、コジマは一步あとずさりして、やおら炉^ろ辺^べに腰を下ろした。私はそれでも身動きせず、相変わず眠っている風を装った。安心したコジマは、火をかき回して、膝^{ひざ}の上で腕^{うで}を組むと、俯^{うつむ}いた姿勢になった。泣いているのではと思われた…その時、私のなかで何が起こっていたのか、うまく云いあらわせない。もはや、私は馬のことも栗の実のことも婚礼のことも忘れてしまっていた。コジマの口づけのせいで、私は顔がほてり、頭のなかを、とりとめもない考えが去来していた。

夢だったのだろうか？ どのような意味があるのか？ あんなにも美しく若く裕福^{ゆうふく}なコジマが、ほんの数日で私に恋をしたとでもいうのだろうか？ よそ者の正体の知れないこの私に。彼女には、私が他の女性と婚約していることが判っているのに？ …

私は自分の感覚を信じることができなかった。それでも、あの物影になったところに、人知れず涙を流している綺麗^{きれい}な乙女^{おとめ}がいることは分かっていた。私の頭は混乱して、本能的に熱い血が上ってきた。困ったことだ。この誘惑を、どうしたものか！ もし、コジマが再び私に接吻^{キス}するようなことになれば、覚悟をしても、私は正気を失ってしまったことだろう。

ところが、彼女は私に見向きもしないで、出て行った。

翌日、青ざめて、眼を赤くしている彼女に出会った。私は何も云わなかった。彼女が席^{せき}をはずしたスキを見計らって、一人で私は服を着ると、暖炉^{だんろ}の近くに座った。彼女が入ってくると、出発したい旨を彼女に語った。

《そうでしょう。》——彼女は冷ややかにこたえて云った——《満足な手当てもしてあげることができなかったので、ここから出て行きたくて仕方がないのも無理ないわ。》

《何てことを！》——私は大きな声で云った——《いろいろとお世話になり過ぎたぐらいです。命を救って頂いたのだし、このご恩は決して忘れることがないでしょう。出てゆきたいと申し上げるのは、これ以上お邪魔^{じゃま}したくないからです。コジマ、さっき何てあなたはおっしゃいまし

た？ この私を朴念仁^{ぼくねんじん}とでも思っているのですか？ あなたのお世話に対して、どのようにして恩返しをすればよいのか困っているほどです。さあ、はっきりとおっしゃって下さい。何なりとご希望を聞かせて下さい。あなたのためなら、何でも致しますから…》

こうしたことをはっきりと云い終わらないうちに、私は後悔し始めていた。それは、コジマの眼に喜びの感情を見て取ったからだ。もし、彼女が無理を云って…愛してくれなどと詰め寄ってくれば…

《それじゃあ、いっそのこと病気が完全に治るまで、ここに居なさい》——彼女はそう云った。私は留^{とど}まることにした。おまけに旅を企てるには体力もなく、やれそうもなかったし、天候も最悪だった。でも、私は気が休まらなかった。コジマの不思議な誘惑に屈してしまうような予感がしていた。私は誘惑を克服しようと必死だった。ところが、美しい娘のことを心に思い浮かべると、それがかなりリアルなので、頭から離れなくなった。病気の熱よりも彼女から受けた接吻^{キス}の記憶が原因となって、私はひどく震えるのだった。

私はできるだけシモーナのことや彼女の立場や冒してはならない婚約のことを考えようとしたが、それも無駄だった。私が覚悟すればするほど、私の眼の前に美しく魅力的なコジマが現れて、にっこりと微笑んでは、私の眼をジッと見つめて誘い、そうして口では云えない多くのことを彼女は私に語るのだった。それに耐える苦痛と動揺^{はんもん}と煩悶^{はんもん}の、神よ、何とすざましいこと！ 子供のように私は泣きじゃくった。しかも夜更けて、嵐が猛り狂っている最中に、私は一度ならずこの地獄のような状態から脱出したい気になった。このような状態が続くなら、いっその山なかで死んでしまった方がましだったと自分に云い聞かせていた。なぜ私を助けてくれたのか？ なぜなのだ？ …

心の痛手が、私の病状を悪化させた。体^{からだ}中の血管も頭も発熱した。世話になっておきながら、そのコジマのことを私は憎々しく思っていた。毎晩、コジマは私のところへやって来ては、暗がりですべての接吻^{キス}をしてくれるのだった。こんなことは、ずっと続くわけがなかった。とうとう私は、すべてが夢であり、悪魔^{しわざ}の仕業であるに違いないと思ひ込むようになり、そうした考えに囚^{とら}われると、私はそれを確かめてみよう^とと決心した。もしそうしなかったなら！ …

コジマが、私に接吻^{キス}をしてくれた晩のことだった。彼女の両手をグッと握ると、私は眼を見開いて、定かでない火の光のなかで、彼女をジッと見つめた。彼女は黙ったままだった。でも、体中が震えていて、私が口をきくまで待っていた。

《コジマ…これはどういうことなのだ？ …》——私はキツとなって問い詰めた。

彼女は膝^{ひざ}からくず折れると、両手で顔^{おほ}を覆^{おほ}って眩^{つばや}いた——《ご免^{めん}なさい！ …あなたのことが死んでしまいたいほど好きなの！ …》

私の体も震えだしていた。それでも元気を出して、私は感動の声を張り上げていた。

《何て云ったの？ 私が結婚していることを知らないの？ …》

《嘘だわ！ …何でも私は知っているわ…あなたが婚約していることも、シモーナの立場も存じています。でも、村の人々が異口同音^{いくどうおん}に、あなたが…の唯一の父親ではないと云っていること

も知っているわ。》

《コジマ！》 — 私は正気を失って叫んでいた — 《人を中傷するのはよしなさい。私のことを好きで愛していると云うのなら、まだいい…でも、中傷はよくない…》

《私が理解していることを云ったまでなの。そんな風に叫んだりしないで！ ベッパが目を覚まして、何もかもバレてしまうから…あなたのことを愛している私を捨てないで！ …》

その様子が、あまりに哀願する風だったので、声のトーンを落として、彼女の恐ろしいことばの意味するところを説明してくれるようにと、私は震えながら彼女に訊ねてみた。彼女はいろいろの話を私に物語ってくれたが、その詳細を覚えているわけではないし、ちゃんと聞いてもいなかった。ただ、私にとってひとつだけはっきりしてきたことがあった。それは、私が不名誉にも騙されて、シモーナは私のことを愛しているのではなく、私だけが共犯者ではないある罪の責任をとるために、愛しているような風を装っているにすぎないということだった…ああ、何とおぞましいことだろうか。ぞっとするではないか。]

「まあ、憐れ！ …」 — エリアスの話を遮ると、両腕をバタつかせながら、顔色を失ったシモーナは大きな叫びを發していた。ところが、兄弟のターヌは、彼女とは違った考えで、辛辣な不信の笑みを浮かべながらエリアスの話に耳を傾け、彼の物語がまったくの絵空事だと決め付けていたので、やっとの思いで彼女を宥めると、からかうように、こう云った。

「その先を話してもらおう。でも、手短にな…」

「簡潔にまとめよう。コジマはその証拠を見せようと云った。やがて、彼女は突如世も末もといった感じで泣きじゃくと、しきりとしゃくりあげた。

《それで、》 — 私は驚いて訊ねた — 《なぜまた、こんな時に泣いたりするの？ …》

実を申せば、この私自身じっと聞いておれず、喉を締め付けられるような気がしていた。コジマが私に語って聞かせてくれたことを、私は信じてもいるし、信じてもいなかった。私は無性に彼女に平手打ちをくわせたくなって、出来ることなら彼女に口づけして、《あなたのことが好きだ。シモーナを軽蔑する》と云うところだった。

《ご免なさい…赦して下さい…》 — 彼女は涙に枯れた声で、くり返し云った — 《あなたがこの私を愛することができないのは解っているわ。あなたは、あの女を愛しているのですもの…私が云ってしまったことに対しては謝ります…でも、やっぱり私はあなたのことがとても好き…死んでしまいたいほどの…あなたがこの私を憐れに思っただけなら、不吉なことが起こるかもわかりません…》

《コジマ、コジマ。》 — 私は彼女に云った — 《私のようなものを、どうして愛することができるの？ 私は貧乏人で、たとえこの私が愛を告白したとしても、あなたの親族は許しを与えてくれないでしょうに。》

《私には親族などいません。私は独立独歩の人間で、自分のことは自分で決めます。それでも、あなたはこの私を愛することができず、そうしたくないとおっしゃるの？ あなたが愛しているのは、あの女だから…》 — 彼女はそのことばを吐き捨てるように強調して、さらに続けた —

《私はあなたのために死んでみせるから…》

《ああ、エリアス、もし私がどれほど苦しい思いをしているか解かってくれたら！あなたに出会った当初から、私はあなたのことが好きになり、私の屋敷にあなたが運び込まれたことが、私に死をもたらしに違いないと、はっきりと自覚したの。でも、私は何も要求などしません。もし、出て行きたければ、出て行っていいの。でも、私のことを忘れないで…注意するがいいわ。私の唇が意味していることを、あなたは何も理解していなかった。シモーナと結婚しなさい。でも、もし不幸に思うことがあれば、この私の方がずっと不幸だってことを忘れないように…》

こうしてコジマは長い間、ずっと私の上に身を屈めたままの姿勢で、熱い吐息を私の顔の面に吹きかけ、その涙で私の両手を濡らしながら物語った。いったい全体、どのような世界に自分が棲んでいたのか見当もつかず、私は唇を噛みしめ、やっとの思いで涙を堪え、今にも爆発しそうな胸の裡をグッと抑えて、同時に突き上げてくる罵りの気持ちをねじ伏せた。

火はかき消えていた。暗がりのなかに、私たちは佇んでいた。

《さようなら、アデュー！…》——コジマは云った——《これで失礼します。あなたは明日お発ちの予定だから、もうお会いすることもないでしょう。エリアス、私のことを忘れないでね、お願い。さようなら、アデュー！…出て行っていいの。私は何もあなたに要求しません！…》

彼女は、私に何も要求しなかった。でも、その間も、私の顔は、彼女の接吻と涙で覆われてしまった。涙は、まるで鉛の雫のように思われた。狂ったように長い接吻をされると、唇も眼も頬も熱くなって、わずかに残っている私の理性を奪い去ってしまいそうだった。

《コジマ、》——私は彼女の頭を両手で抱え、彼女に接吻のお返しをしながら、かすれた声で云った——《あなたのことが好きだ。私は居残っていたい！…》

「二日経って、」——エリアスは締めくくって云った——「コジマ家に司祭がやって来て、私たちは秘かに結婚式を挙げた。私はずっと熱があって、何も解らないで、事の成り行きに任せていた。

その当日、結婚の告知がなされ、三週間経って、法の定めるところによって、私は永遠にコジマと結ばれていた。このような次第で、当初の情熱的な期間が過ぎ去り、我に帰ってみると、まずいことになっていることが解かり、シモーナに関する噂が、まがいもなく中傷であると納得したのであったが、もはや後の祭りであった。]

「この話がすべてでまかせでないと、誰が保証してくれるのだ？…」——ターヌがぞっとするような声で叫んだ。

エリアスはうなだれ、彼の眼から希望の光がうせてしまった。彼は自分のことばにまったく心を動かされていない復讐者たちの表情から、自身に宣告が下ったことを知った。そして、死刑宣告を受けた若者の人間的に耐え難い責め苦を味わっていたが、卑劣漢と思われなくなかったので、それを外に出そうとはしなかった。

「その通りだ！」——彼は云った——「誰も私を擁護することはできない…」

彼は視線をシモーナの方へとやった。でも、若い女の視線は、彼から遠くに向けられていた。

だが、それでも？ たとえ彼女が助けてやろうとしても、それは所詮不可能なことだろう。

「お前には死んでもらおう！」—— 陰鬱な調子で、父親が宣告を下した。

長い沈黙が流れた。エアスの運命はすでに決まっていた。彼が10年前に倅せな多くの時を味わった宿命の家から出てゆく必要はなかった。コジマの物語は、彼が恥をかかせた一族の血の復讐を撤回させることにはならなかった。ピエートロの手に握られた猟銃は、ずっと閃きを放っていた。彼は、自分の妹の不運を齎したそもその原因と見做されていたのだが。

やがて、生かすか殺すかが問題になった。エアスを救えば、彼らは負けたことになる。そもそも彼は例の恐ろしい夜の責任を取って、たとえ有力者で金持ちであったとしても、従容として罪の償いをしなければならなかった。つまり、彼は死ななければならなかった。

一抹の不安とか躊躇いの感情は、貧しく辛い生活で硬直化してしまった心の持ち主たちには無縁だった。彼らにとって、復讐は信仰だった。神は憎悪の姿をとっていた。

ある晩のことだった。彼らは妒妬を囲むと、一度たりとも消えることのない火に手をかざして、挑発には血の償いをさせるとの誓いを立てていた。何ヶ月も何年も待ちに待って、ようやくその夢がかなう時がやってきたのだ。

彼らは、ほとんど一心不乱に祈りを捧げるかのように、ひとりの男を殺す準備に取りかかった。義務を遂行する覚悟を決め、もし彼らとその箴言など解らない神の御前で、堂々と救えば、きっと後悔するに違いないと思込でいた。彼らに劣らず、神は過酷な存在とされていた。

「出ていろ！ …」—— ピエートロはシモーナに向かって云った。

「いや、最期を見届けるまで、出ないわ！ …」—— 若い女は、きっぱりと応えて云った。エアスは、心底ビクッと身体を震わせた。

ピエートロは猟銃を構えた…

戸外では、風雨と雷鳴が、筆舌に尽くせない轟きとなって、ゴーゴーと唸っていた。まるで人間の叫び声のようでもあり、山崩れの音のようでもあった。それは、人間の格好をした悪魔が棲息する黒い廢屋のなかでなされた犯罪に対する神の正当な怒りであった。

ピエートロはエアスに狙いを定めた。ところが、彼が引き金に力を入れようとした瞬間、明らかに風のせいではない乾いてよく反響する物音が、中庭に面した門のかかっている小さな扉から聞こえてきた。彼らは誰しも、お互いギョッとして顔を見合わせた。その唇は蒼白になり、心臓は凍りつき、猟銃はピエートロの膝の上に転がった。

いったい何者なのか？ 彼らは見られていたのだった…計画は失敗に終わったのか？ …

慌てふためいて、シモーナはさっと立ち上がると、「ガビーナ、ガビーナ！ …」と恐怖の叫び声を上げながら、扉めがけて、手負いのハイエナさながら、身震いしつつ跳ぶように突進した。彼女が扉を開けると…

彼女が見出したのは、地面に失神して倒れ、濡れ鼠になっている幼女だった。一部始終を目撃したガビーナは、もう耐えることができなくなって、恐怖とショックで失神してしまったのだ。

「お前だったの！ …ガビーナ、可愛いガビネッタ…愛しい子！」——そう云って、シモーナは両腕に彼女をかき擁くと、炉辺へ運んでやった。冷たくなって、すっかり青ざめ、濡れ鼠の彼女が眼を瞑りショックで動転した表情をしているのを目の当りにすると、シモーナは子供が死んでしまったものと思い込み、エアスのことなど、すっかり忘れてしまい、発作的に泣き出していた。彼女の優しい名前を何度もくり返し呼び、びしょ濡れの衣服を脱がせて、痙攣している小さな足を暖めてやり、狂ったようになって口づけするばかりだった。

だが、ガビーナに、生きている兆候は見られなかった。

「ガビネッタ…愛しいガビネッタ…最愛の娘…私のいのち、私の宝！ ひどい！ 死んでしまうなんて…私の愛し子が、私の唯一のよろこびが死んでしまうなんて！ …小さな花のガビーナ、可哀想に、ほんとうに可哀想に…私はどうしたらよいの…神さま、どうか教えて下さい。どうすればよいのか…彼女は死んでしまった…お父さん、ご覧になって。触れてごらんになって、死んでるわ…冷たいわ…死んじゃったんだわ、ああ、神さま！ …」

シモーナは手足をバタつかせ、イライラしていた。気がふれたようになって、ある瞬間には話し始め、またある瞬間には、ガビーナが意識を取り戻したように見えるのか、微笑みを浮かべ、やがてまた狂人のように泣きじゃくり始めるのだった。

その間、ターヌとピエートロは訳が分からず、啞然となって互いの顔を見詰め合っていた。幼い女の子は、確かに一部始終を目撃して理解していた。とすれば？ …

エアスは押し黙ったまま、じっと陰鬱な絶望の表情で、幼女を凝視していた。

「ああ、この女が死んでいるなら、それが本当なら？」

ところで、ひじょうに迷信深い伯父のトットイは苦笑しながら、その背後に彼らを罰するか、少なくとも警告を発している神のご配慮が存在すると考えていた。光明が老人の魂を満たしていた。彼の心に、偉大な考えが輝き出た。老人はシモーナが膝に抱えているガビーナを奪うと、ターヌの両腕に彼女を委ね、彼にこう云った。

「さあ、女の子を寝台へ運び上げるのだ…それで、ピエートロ、お前は走って行って、医師を呼んで来い…」

「でも、お父さん?!」——若者は、カッと眼を見開いて、エアスの方を目配せしながら叫んでいた。その間、大人しく、ターヌは両腕でガビーナを抱き上げ、背後からシモーナが明りを手に部屋を出て行った。

「行くのだ！」——老人は答えて云った——「行けと云っているのだ。何も不都合なことは起るまい！ …」

父親を信頼し、姪のことがとても気に入っているピエートロは、女の子が死んでしまったか瀕死の状態と思い込んでいて、獵銃をしまうと、部屋を出て行った…

伯父のトットイは、時をおかず、扉に近づくと、名前を呼んでいた。

「シモーナ、シモーナ！ 降りて来い…」——すぐに若い女が降りてきた。

「シモーナ」——その父親が、謎めいた厳かな声で呟くように云った——「ガビーナは一部始

終を目撃したのだ。これが神のご配慮だ…シモーナ…」

若い女は了解した。彼女は身動きもしないで、黙ったままエリアスをじっと見つめていた。その大きな^{なまこ}眼の^{いんうつ}陰鬱な輝きから、心の内面で戦いがくり上げられていることが読み取れた。「神のご配慮なのだ！ …」 — 老人はもう一度くり返した。

間髪を入れず、シモーナはエリアスの方へ走って行くと、彼を縛^{しば}っているローブを解いてやった。彼が自由になると、彼の手を取って、中庭へと案内した。古ぼけた大きな門の扉^{ドア}を開けると、彼を通りへ押し出した。そして、こう云った。

「さっさと出てゆくがよい。お前の娘のことは忘れないように！ …」 — 彼が遠ざかってゆく足音が嵐の轟音^{こうおん}に掻き消されてしまうまで、彼女はその場にじっと^{たたず}佇んでいた。

註および参考文献

本稿で使用したイタリア語テキストは Grazia Deledda, *Racconti sardi* (Dessi, Sassari, 1894 [Ilisso Edizioni, Nuoro, 1996]) で、巻頭の第一短編 *Di notte* (p. 3-p. 15) を試みに本邦初訳として邦訳紹介してみた。

正規の高等教育は受けずとも、独学で作家としての資質を遺憾なく伸ばして大成した典型的な実例が、1871年9月27日にヌオーロの名家に生まれた作家グラーツィア・デレッタである。家庭教師についてイタリア語、フランス語、ラテン語を修得した彼女の作家修業は、伯父の司祭から貰った蔵書をくりかえし熟読することから始まった。なかでも大デュマ Dumas, オーネ Ohnet, ブルジュ Bourget といったフランス作家を味読することによって、創作の秘訣を会得した。最初に彼女の文学的才能を見抜いたのは、家族と親交があったサッサリの郷土史家エンリーコ・コスタだった。若くしてサルデーニャの『星 *La stella*』誌上に短編小説を発表、1888年および1889年、ローマのファッション雑誌『最新モード *Ultima moda*』誌上にサルデーニャもの小説『サルデーニャの花』を連載、1892年ミラノで単行本として刊行されるにいたる。アルコール中毒患者の兄サントゥスや窃盗犯の弟アンドレアがいた上に、1892年11月5日石炭商の父親が心筋梗塞で急逝し、経済的に困窮したが、評論家の賞讃を受けて、文学界に知られるようになり、デ・グベルナーティス De Gubernatis やルイーダ・カプアーナ Luigi Capuana の注目するところとなった。1895年、ルッジェーロ・ボンギ Ruggero Bonghi が『つましい人々 *Anime oneste*』(Cogliati, Milano) に序文を寄せる。1899年、ローマ出身の財務官僚パルミーロ・モデサーニ Palmiro Modesani とキャリアで知り合って、1900年結婚後ローマに移り住む。夏はトスカーナの海浜リゾート地ヴィア・レージョでティレニア海の風光に親しみながら、創作活動に携わった。その読書体験から過剰な描写とさほど重要でない登場人物を潔くカットする手法を会得した。個人的な感情移入を排した彼女本来のスタイルを長編小説に採用、より普遍的な人間描写を確立した。1926年9月10日ノーベル文学賞 Premio Nobel per la letteratura を最初のイタリア女性作家として受賞した。その賞金を元手に親交があった作家マリーノ・モレッティの故郷チェゼナーティコにほど近い海浜リゾート地チェルヴィアに別荘を購入し、夏は遠浅の海が見渡す限り続くアドリア海の微風に吹かれながら晩年の創作活動に従事した。1936年8月15日、自伝的作品『コジマ *Cosima*』(1937年ミラノで遺作として出版)を書き上げた直後に乳癌で逝去。

グラーツィア・デレッタの作品は、作家個人の知的遍歴を強く反映しているが、19世紀小説の枠組みとか^{ヴェリズモ}真実主義 *verismo* やフランスの^{ナチュラルイズム}自然主義 *naturalismo* francese はいうまでもなく、

デカダニスム^{デカダニスム} decadentismo は論外としても、宗教感情の葛藤と登場人物にのしかかる罪の意識を巧みな抒情的描写 *lirismo descrittivo* によって掘り下げ、彼女独特の主題に相応しい固有の抒情性 *lirismo ingenuo* を基調に、モラル的人物造形と実に古風なサルデーニャの因習的道德観を表明する。

我が国で最初にデレッダに言及したのは、永井荷風だった。大正2(1913)年4月20日靱山書店刊行の『珊瑚集』で、著者永井は377頁から425頁にわたってモーリス・ミュレ著『伊太利亜現代文学』を抄訳して、〈伊太利亜新興の閨秀文学〉と題する1章を設け、最近30年間に頭角を現した女性著作家 *マチルデ セラオ アンニイ ギアンチ アダ ネグリ ネエラ* Clarice Tartufari 夫人、D. Melegari 嬢、*グラチア デレッダ テレザ テレサ ウベルチス* Grazia Deledda 夫人、Teresah [Teresa Ubertis] 嬢、*アメリカ ロセリ* Amelia Rosselli 夫人の名前を掲げ、特に後者三女性作家の論評をやや詳しく紹介している。デレッダについては、特に『山中の老人 *イル エツキヲ デーラ モンタニャ* Il Vecchio della Montagna』と『灰 *チエネレ* Cenere』を俎上へのせ、サルデーニャの風俗作家からより普遍的な人間心理とその真実描写に方向転換しようとして試みている経歴に焦点を合わせて論評している。

1972年主婦の友社が企画・刊行した〈ノーベル賞文学全集 Nobel Prized Literature〉全24巻別巻1(後援スウェーデン・アカデミー/ノーベル財団)中の第5巻が、グラツィア・デレッダを扱っている。大久保昭男氏によって翻訳されている作品は『コロンバ』、『誘惑』、『マルヴェー家』で、ジュゼッペ・ラヴェニャーニ著『人と作品』および詳しい著作目録が付いている。同書所収の月報で、訳者大久保氏は、1927年デレッダのノーベル賞受賞時点で、岩崎純孝氏が短編小説集『明暗』集中の『狐』一編を雑誌『改造』に訳出していることに触れている。また、そこで『愛の封印』(岩崎純孝訳)、『正直な心の人々』(下位女史訳)、『悪の道』(岩崎、有島生馬共訳)、『砂漠の中』(岩崎訳)、『離婚のあと』(岩崎訳)が戦前・戦中にかけて翻訳紹介され、1970年代には弘文堂から『灰』(丸弘訳)が出たことを報じている。

巻頭に元パリ駐在スウェーデン大使館文化参事官セル・ストレムベリイによる「グラツィア・デレッダに対するノーベル文学賞授与の選考経過」報告が掲載されているが、1927年段階で23人もの候補者が挙がっていて、なかでもギリシア詩人コステス・パラマス、フランス作家エドゥアール・エストニエ、米国作家イーディス・ウォートン、ドイツ作家トーマス・マン、ノルウェー作家シグリ・ウンセット、イタリア作家アーダ・ネグリ、ローマ方言詩人チェーザレ・パスカレッタ、歴史家グリエルモ・フェッレロといった強敵がいたと云われる。